

1
2 台本「つづらみちその1-みわのアメに召されて-」
3
4

5 **1. ご挨拶パート**
6
7

8 「はい、センセ、今宵（こよい）は珍しいアメを、ご覧に入れます、約束でしたね」（センセは先生
9 の訛った呼び方）

10 「はい、センセ、申し遅れましたが、ここ『つづらみち』を、いつもごひいきに、ありがとうございます。
11 今回は私（わたくし）、『みわ』がセンセの、お相手いたします。どうぞ、よろしく、お願
12 いいたします。」

13 「はい、センセ、今宵（こよい）、ご覧に入れますはアメ、でございます。」

14 「ただの、アメでは、ございません」

15 「聴くも、味わうも、すべてがアメ、外国由来のアメ砂漠（さばく）、砂（すな）アメの『月下』
16 （げつか）でございます。」

17 「まあいアメの中に、その砂？を、砂時計のように閉じ込めた、嗜好品（しこうひん）、でございます。」

18 「普通の製法（せいほう）では、すぐに、中で固まってしまって、オシャカになってしまうのですが、
19 これは中国の、広東（かんとん）、からその技術を、持ち帰りましたポーランド人が、東北の理想的
20 な気候の中で、丹精（たんせい）込めて、作り上げた一品（いつびん）、でございます。」

21 「（エヘン、と軽く咳払いをする）口上（こうじょう）は、不要ですか？では早速、閉じ込められた
22 砂のほど、ぜひとも、耳で、味わってくださいまし。」

23 「お耳に聴かせますので、私の膝に、頭をさ、お乗せ下さい。」

24 **2. 耳音パート**
25
26

27 「（「ウン」というようなうなずいた声）では、失礼して…」

28 （約一分、砂アメの流れる音）

29 「ひと流れ、しましたか？では、ひっくり返して、もう一回…」

30 （約一分、砂アメの流れる音）

31 「はいな、ひと流れ、一分（いっ�ん）、でございます。」（「はいな」は「はい」が訛って言って
32 いる）

33 （約一分、砂アメの流れる音）

34 「ようがす。」（「ようがす」は「いいですよ」という類の意味の古い言葉づかい）

35 （約一分、砂アメの流れる音）

36 「はあいい。」

37 （約一分、砂アメの流れる音）

38 「さああっと。」

60 (約一分、砂アメの流れる音)
61
62 「では、反対のお耳も…」
63
64 (約一分、砂アメの流れる音)
65
66 「(ンフッというようなニュアンスの声)」
67
68 (約一分、砂アメの流れる音)
69
70 「はいっ。」
71
72 (約一分、砂アメの流れる音)
73
74 「セーンセっ」
75
76 (約一分、砂アメの流れる音)
77
78 「さらさらさらあ」
79
80 (約一分、砂アメの流れる音)
81
82 「もう、よろしいのですね。お楽しみ、いただけましたか」
83
84
85

3.飴舐めパート

86 「別の『月下』(げつか)、をご用意、いたしました。今度はゆうっくり、たんねんにアメの、『月下』の奇妙(きみょう)を、味わって、くださいまし。」

87 「では、セーンセ、お口を、開けてください。アーンー。」

88 「味、ですか?…なんの味か、多分、袋に、書いてあると思うんですけど……なんの味か、書いてませんね……なんの味か、わかりませんね……」

89 「(再び)アーンー。(フフッというようなニュアンスの声)失礼、いたしまーす。」

90 「余計な言葉は、いりませんね。ぜひ、その舌先で、歯の裏側で、感じてください、味わって、くださいまし、センセ」

91 「(フフッというようなニュアンスの声)大事に味わってください、ありがとうございました。」

92 「本日のアメの品(しな)は、以上でございます。…さて、歯を、磨きましょう。口をゆすいで、歯を磨いて、お口をきれい、にするまでが、アメ舐めで、ございます」

4.歯磨きパート

93 「では、お口、失礼いたします」

94 「ゴシゴシ、シュッシュ。ゴシゴシ、シュッシュ」

95 「ゴシゴシ、シュッシュ。ゴシゴシ、シュッシュ」

- 118
119
120 「はい、お水、です」
121
122 「ウン！仕上がりましたね…」
123
124 「(フフッというようなニュアンスの声) ものたりませんか？……そうね。でしょうね。そうでしょ
うとも。」
125
126 「…『月下』の砂はあ…人の情欲（じょうよく）をお、…搔き立てるものなのでございますよお。」
127
128
129 「愛の欲求にい、むせび泣きそうな顔、し、て、る」
130
131 「お耳、砂の毒でえ、ほてってるねえ…」
132
133 「どうして、ほ、し、い、の？」
134
135 「いいわ。してあげる。」
136
137
138 **5.耳舐めパート**
139
140
141 「砂糖の砂漠（さばく）の、サソリの甘い毒にい、召（め）されてしまいなさいな」
142
143
144 「あーんー」
145
146 「はむつ…。れろお…、ちゅつ…。」
147
148 「んー、耳、あんまーい（甘い）！」
149
150 「じゅるり…、れろれろ…。ちゅつ…。ちゅつ…。はむ…、ちゅつ…。じゅるじゅる…。」
151
152 「耳舐めってえ、気持ちいいのよ？」
153
154 「はむつ…。はむつ…。じゅる…」
155
156 「気持ちいい？」
157
158 「はああ…じゅるり…」
159
160 「気持ちいいでしょ？」
161
162 「じゅるり…、れろっ…」
163
164 「気持ちいいのよねえ？」
165
166 「れえろお…。はむはむ…、ちゅつ…。じゅるじゅる…。ちゅつ…、れえろお…、ふう…、ずずつ
…、はあむん…。ずずずつ…」
167
168
169 「そおこ」
170
171 「ふうむう…。ずずつ…ふうむう…。ずずつ…」
172
173 「恥ずかしいくらい」
174
175 「れろお…。ずずずつ…はあむん…。ずずずつ…」

- 176
177 「充血（じゅうけつ）」
178
179 「んむつ…、はあはあ…。はむつ…、じゅるじゅる…。」
180
181 「し、て、るう」
182
183 「じゅるり…、れろお…、ちゅつ…ちゅつ…。じゅるじゅる…。ちゅつ…、はあむん…。れえろお
184 …、ふう…、ずずつ…、ずずずつ…じゅるり…、れろお…、ちゅつ…ちゅつ…。じゅるじゅる…。
185 ちゅつ…、はあむん…。れえろお…、ふう…、ずずつ…、ずずずつ…」
186
187 「センセエ？」
188
189 「じゅるり…、れろお…。ずずつ…」
190
191 「センセエ…」
192
193 「はむつ…。じゅるり…、れろれろ…」
194
195 「センセエ…！」
196
197 「じゅるり…、じゅるり…、じゅるり…、じゅるり………！」」
198
199
200 「あっ…」
201
202 「出ちゃいましたねえ。毒、出ちゃいましたねええ。ドクン、ドキュンって出てる。」（ド「キュン」
203 で間違いない）
204
205 「では、失礼して。」
206
207 「（「じゅるり、れろお」と主人公の体液をする音）んっ、センセエってしょっぱ（塩っぱい）。
208 絡みについて、飲み込むみたいへーん」
209
210 「ん…。ごちそうさまでした。甘味（かんみ）の受けには、ちょうどよい口直しでした！」
211
212
213 「ごめんなさいね。ここまでが、アメの妙味（みょうみ）なので、ございます。お楽しみ、いただけ
214 ましたか…？」
215
216 「（フフッというようなニュアンスの声）ずいぶん、お疲れのご様子。今夜は、このまま、お眠りく
217 ださい。遠慮、なさらず。私も、ご一緒、いたします。」
218
219
220

6.添い寝パート

221
222 「お布団（ふとん）の中、あたたかい。私とセンセの、体、ひとつだけ」
223
224 「聞こえますか。私の心（こころ）の音。私の、体、をめぐる音。私の、中の、音。」
225
226 「（フフッというようなニュアンスの声）…ひつじが、1匹。ひつじが、2匹。ひつじが、3匹。ひつ
227 じが、4匹。ひつじが、5匹。ひつじが、6匹。ひつじが、7匹。ひつじが、8匹。ひつじが、9匹。ひ
228 つじが、10匹。ひつじが、11匹。ひつじが、12匹。ひつじが、13匹。ひつじが、14匹。ひつじが、
229 15匹。ひつじが、16匹。ひつじが、17匹。ひつじが、18匹。ひつじが、19匹。ひつじが、20匹。
230 ひつじが、21匹。ひつじが、22匹。ひつじが、23匹。ひつじが、24匹。ひつじが、25匹。ひつじが、
231 26匹。ひつじが、27匹。ひつじが、28匹。ひつじが、29匹。ひつじが、30匹。ひつじが、31匹。
232 ひつじが、32匹。ひつじが、33匹。ひつじが、34匹。ひつじが、35匹。ひつじが、36匹。ひつじが、
233 37匹。ひつじが、38匹。ひつじが、39匹。ひつじが、40匹。ひつじが、41匹。ひつじが、42匹。

287

288 「私も、このまま、眠るといたしましょう。」

289

290 「またの、ご来店、のほど、お待ち、しております。センセ…」

291

292

293

～台本終わり～